

F/T12

FESTIVAL/TOKYO



東京文化発信
プロジェクト

イエリネク三作連続上演

レヒニッツ(皆殺しの天使) /

作: エルフリーデ・イエリネク 演出: ヨッシ・ヴィーラー

製作: ミュンヘン・カンマーシュピール

Jelinek Series: Rechnitz (Der Würgeengel) /

Text: Elfriede Jelinek Direction: Jossi Wieler

Production: Münchner Kammerspiele

11/9 (Fri) - 11/10 (Sat)

東京芸術劇場 プレイハウス

Tokyo Metropolitan Theatre, Playhouse



2020年オリンピック・
パラリンピックを日本で!

© Arno Declair



ドラマトウルクによる作品解説 言葉の洪水と沈黙の壁

ユリア・ロホテ(ミュンヘン・カンマーシュピーレ ドラマトウルク)

1945年3月24日の夜から25日未明。オーストリア=ハンガリー帝国の国境付近に位置するレヒニッツ村の城で、ナチス親衛隊、秘密国家警察(通称ゲシュタポ)、地元のナチ党党员による「友愛パーティ」が開かれていた。人々が酒を酌み交わし、踊る、そのパーティーの最中、虚弱で仕事に適さなかった200人弱のユダヤ人強制労働従事者が、容赦なく殺害された。一部の参加者には、地元党员のリーダーから武器が手渡され、ユダヤ人たちは裸にされ、ひどい仕打ちを受けた後、次々と射殺あるいは撲殺されていた。

ウィーン地方裁判所に保管されている戦後の訴訟記録によれば、パーティにはナチスの武装親衛隊の保養地として開放されていたこの城の主、「地獄からのホスト」バッチャーニ伯爵夫妻も同席していたようだ。ティッセン・ボルミネッサ家に生まれた、妻のマルギト・フォン・バッチャーニは、鉄鋼王アウグスト・ティッセンの孫娘。彼女はレヒニッツでの一夜の殺戮について一度も告訴されることはなかった。ソビエトの赤軍が国境を突破し城に進駐する直前に、伯爵夫人は召使と夫と愛人のオルデンブルグと共にスイスに逃亡した。オルデンブルグはボデツィン指揮官と並んで、裁判での重要な被告人の一人であった。逃亡後、彼女は競走馬の養育に専念し、1989年に亡くなった。ボデツィンはバッチャーニ夫人の助けのもと逃亡に成功し、1963年まで(ドイツ北部の都市)キールで保険外交員として働き

ながら平穏に暮らしていたが、新たに捜査が行われていることを知ると、南アフリカに高飛びした。また、オルデンブルグはアルゼンチンに姿をくらました。

この夜の死者が眠る墓場の探索は、ユダヤ人コミュニティ、オーストリア内務省、ドイツ戦没者墓苑委員会の主導で繰り返し行われているが、今日まで失敗に終わっている。戦後、捜査の最中に当時の目撃者が殺害されたこともあり、レヒニッツには現在も、恐怖に満ちた雰囲気と、多弁ながらも事件の核心については隠蔽を続けようとする体質が蔓延している。人々は当夜のこと、銃声のこと、撃たれた人々の悲鳴のことは口にしない。しかし、その銃殺がどこで行われ、どこに死人が埋められたのかについては一切口を開かない。ある地元住民は「ユダヤ人は嘆きの壁を、私たちは沈黙の壁を立てている」と言う。

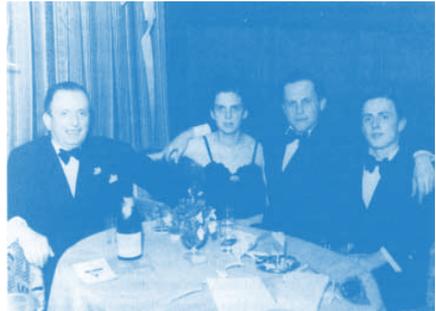
イエリネクは『レヒニッツ(皆殺しの天使)』で、堂々たる報告者たちを集めた。捜索に対する彼らの発言は、私たちが苛立たせるものばかりだが、イエリネクはその言葉の層を一枚一枚剥がしながら、証言の描く内容とそれによって隠蔽された窪みフレーターに向かって、進んでいく。イエリネクはこの歴史的犯罪を再構築するにあたって、細部の正確さの一つひとつ追求したりはしない。にもかかわらず、この巨大な物語のあらゆる細部は、「思考のカジノ」の計算された無制御状態に置かれたルーレットボールとなり、現代社会の本質を知

らしめている。ナチスによる凶行の分布図へざっと目を通すことは、イエリネクの脳内を旅することを意味し、その旅に出ることは、言葉から言葉へと続く連想の荒々しい流れに乗り、従来正しいと認識してきた物事に、亀裂を生じさせ、大きな揺さぶりをかけられることを意味する。

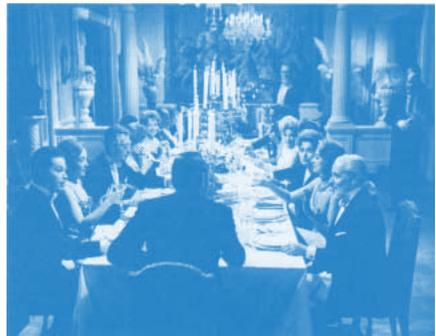
イエリネクは、父親や姉妹の影響のもと、自身が「ユダヤ人家庭では一般的とされる」連想作業に病みつきになっている」ことを認め、「プランクトンを吸収するために繊維で水を絶えずろ過している生物」であるかのように言葉と向き合い、言葉の真の(イデオロギー上の)特徴を解き放つようつとめている。「たとえそれが言葉の意に反していても」

こうして多面的なパズル絵がつくり上げられる。それはフォーガのように構成され、対位法に基づいて作られた、緻密な言葉の網だ。出来事は電池の充電のごとくテキストへと変換され、多彩な方法で描き出される。例えば、ルイス・ブニュエル監督の『皆殺しの天使』(1962年)は、この劇の一種の引き立て役となる。ブニュエルの映画では、客人は夜会に訪れたまま館内に閉じ込められ、召使たちにも立ち去られ、屋敷の外に出られなくなったが、イエリネクは互いに会うことがなかった報告者たちを、紳士たちの狩小屋にて開かれたパーティで出会うように仕向けた。

報告者達の言葉に真実が宿っているわけがない。イエリネクは執筆中の自身のことを「病的な



左から、ハインリヒ・ティッセン・ボルミネッサ、マルギト & イワン・フォン・バッチャーニ(レヒニッツ城主夫妻)、ハイニ・ティッセン・ボルミネッサ



ルイス・ブニュエル『皆殺しの天使』より(1962年)
内容については4pを参照

犯罪者」だと表現する。彼女の怒れる言語は言葉に対する批判でもある。劇中で繰り返される証言は、多弁ながらも沈黙を意味し、仮定された記憶は抑圧の一種特別な形であることが明らかになり、過去と折り合いをつけることは物事と距離を置く別の形にすぎないことが強調される。

また、イェリネクは報告者に多言語で、彼らの敵が用いる言葉をも使わせ、通常とは異なる言葉の不規則な広がりや膨張が表れるまでその言葉を噛み砕いてもらう。「常用する言葉を喉の奥底にしまい込ませることは、驚くほどに人をいらだたせるものなのです」

現在そして未来に私たちは何を望むのか、私たちは過去についてどのように語るべきで、どのように語ることが可能なのかという点について、イェリネクは過去との折り合いはつけず、むしろ、言葉を武器にした巧みな暴露装置を用い、未来に対する後ろ向きな見解を持つことを企てている。第二次世界大戦の被害者・加害者・目撃者が

刻々と減っている中、今日の報告者の証言に関する状況はどのようなものになるのだろうか。

歴史は引火点であり続ける、それを消し去ることはできない。誰かが消し去ろうとすればするほど、それは燃え上がる。グリム童話の『わがままな子供』で、生き埋めにされた主人公が、何度も墓場から外に手を出してくるように。イェリネクは次のように述べている。「この挑戦を真に受け入れない限り、歴史を覆った毛布は、何度も破れ、中身を露呈します。私たちは歴史に取り組まなければなりません。そして、もしアウシュビッツにちなんだ詩情が存在しないのであれば、アウシュビッツでない場所にも詩情は存在しないはずだと考えます。たとえそれがなくなったとしても、それは必ずそこにあるべきものなのです。そして、だとしても、それと折り合いをつけるのは難しいことです」

(翻訳：吉崎香央里)

*ミュンヘン・カンマーシュピール公演時の当日パンフレットより転載

『レヒニッツ(皆殺しの天使)』に参照、引用されたテキスト・映画

映画『黙殺』

エドゥアルド・エルネ、マルガレータ・ハインリヒ 監督、1994年製作のドキュメンタリー。「レヒニッツの虐殺」の被害者の遺体を探す人々や沈黙を貫く地元住民たちにスポットを当てている。F/Tテアトロテークで公開中(10日11時、18時／シアターグリーン)

デヴィッド・R・L・リッチフィールド

『ティッセン家の不気味な美術』

ドイツの実業家、ハインリヒ・ティッセン(レヒニッツ城主・バッチャーニ伯爵夫人の父)は美術品の収集家でもあり、後のティッセン・ボルミネッサ美術館(スペイン)のコレクションの基礎を築いた。同書は、その子孫たちとアートコレクションの盛衰を描くノンフィクション。

ギュンター・シュタンブフ

『あるカニバリストとの対話』

2001年3月、ドイツで起こった人肉食事件の犯人へのインタビュー。

映画『皆殺しの天使』

ルイス・ブニュエル監督、1962年製作の不条理サスペンス。とあるブルジョワジーの屋敷で開催された豪華な晩餐会。だが、食事を終えても誰も帰ろうとはせず、朝がやってくる。するといつの間にか、部屋の外へ出ることができなくなっている。次第に水と食料も乏しくなり、死者も出始める異常な事態が訪れ――。

ニーチェ『ツァラトウストラはかく語りき』

ドイツの哲学者、フリードリヒ・ニーチェによる哲学的散文詩。1885年に全編成立。山中にて多くの知見を得た、神の死と永劫回帰の思想を説く超人・ツァラトウストラを主人公にした物

語仕立ての同作(四部構成)には、さまざまな哲学的議論、思想が擬人化されて登場、寓話的な要素を強めている。キリスト教の聖書に対抗するものとして書かれたとも言われ、『万人に与える書、何人にも与えぬ書』との副題を持つ。

T.S. エリオット『虚ろな人間たち』

イギリスの詩人、劇作家、文芸評論家、T.S. エリオットによる詩編。物事を直視する目を失い、頭に藁くずを詰めた人間が世界の終わりを語る。ジョゼフ・コンラッドの小説『闇の奥』の一節を題辭に引用しており、この小説を翻案したフランシス・フォード・ Coppola の映画『地獄の黙示録』にも登場する。

エウリピデス『バツカイ』

古代ギリシャ3大詩人の一人、エウリピデスによる悲劇。豊穡と酒の神、ディオニソスへの信仰を否定したテーベ王、ペンテウスが、錯乱した女性信者によって、八つ裂きにされる。

ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガー インタビュー

ドイツの作家、批評家で、ブレヒト以後最も重要な社会派詩人とも言われるハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーが、自身の著作『がんこなハマーシュタイン―ヒトラーに屈しなかった將軍』について語ったインタビュー。

フリードリヒ・キント『魔弾の射手』

ヨハン・アウグスト・アーベル、フリードリヒ・ラウンの『怪談集』を下敷きに、フリードリヒ・キントが著した、ウェバー作曲のオペラのための台本。若者たちの恋の三角関係と悪魔に魂を売って手に入れた百発百中の魔弾の行方を描く。

エルフリーデ・イエリネク：詩人、小説家、劇作家

1946年オーストリア生まれ。ウィーン大学で演劇学と美術史を学ぶ。主な作品に、ベストセラーとなった小説『したい気分』『欲望』、戯曲『ブルク劇場』『トーテンアウベルク』『雲。家。』『杖、竿、棒』などがある。ビュヒナー賞を始めとする数々の演劇賞のほか、ドイツ語圏の最も重要な戯曲賞「ミュールハイム戯曲賞」を4回(02, 04, 09, 11年)受賞している。

83年の小説『ピアニスト』は01年に映画化され、その年のカンヌ映画祭で三部門を受賞して話題を集めた。04年『豊かな音楽性を持つ多声的な表現で描いた小説や戯曲によって、社会の陳腐さや抑圧が生む不条理を暴いた』として、ノーベル文学賞を受賞。邦訳されている小説や戯曲も多く、近年ではフェスティバル/トーキョー 09 春にて『雲。家。』が上演されている。



©Hilde Zemann

ヨッシ・ヴィーラー：演出家

1951年スイス生まれ。イスラエルの大学で演劇を学んだ後、80年よりドイツとスイスの劇場で活動を開始。93年オーストリアの現代劇作家エルフリーデ・イエリネクの『雲。家。』をハンブルク劇場で演出、演劇誌による「同年最優秀作品」に選ばれ、ベルリン演劇祭に招聘される。90年代半ばよりオペラの演出も手がけ、シュトゥットガルト歌劇場で『アルジェのイタリヤ女』『ボッペアの戴冠』『ジークフリート』『ドン・カルロ』他多数の演出を行う。2001年ザルツブルク音楽祭で『ナクソス島のアリアドネ』を上演、オペラ誌による「同年最優秀オペラ作品」に選ばれる。02年9月、ベルリン芸術アカデミーよりコンラート・ヴォルフ賞を授与。また、ヴィーラーとドラマトウルクのセルジオ・モラビートのコンビは「2002年最優秀演出チーム」にも選出されている。日本では97年にT.ドルストの『バウル氏』、05年に鶴屋南北の『四谷怪談』を演出した。11年よりシュトゥットガルト歌劇場の芸術監督を務めている。



©A.T. Schäfer



©Arno Declair

作：エルフリーデ・イエリネク
演出：ヨッシ・ヴィーラー
舞台美術・衣裳：アンヤ・ラベス
音楽：ヴォルフガング・シウダ
照明デザイン：マックス・ケッラー
ドラマトゥルク：ユリア・ロホテ
出演：カトヤ・ビュルクレ、アンドレ・ユング、ハンス・クレーマー、スティヴェン・シャルプ、ヒルデガルド・シュマル
製作：ミュンヘン・カンマーシュピール劇場

東京公演
翻訳：林立騎
字幕：萩原ヴァレントヴィッツ健

技術監督：寅川英司+鴉屋
舞台監督：鈴木康郎
演出部：佐藤豪、十万垂紀子、長谷川ちえ
小道具：栗山佳代子
美術コーディネート：福島奈央花
照明コーディネート：佐々木真喜子(株式会社ファクター)
木下尚己(株式会社ファクター)
音響コーディネート：相川 晶(有限会社サウンドウィーズ)
音響協力：(株)エス・シー・アライアンス
字幕コーディネート：幕内 覚(舞台字幕 / 映像 まくうち)
通訳：須賀幸子 田原奈穂子

記録写真：石川 純
記録映像：(株)彩高堂「西池袋映像」

F/Tスタッフ
制作統括：武田知也、小島寛大
制作：戸田史子、クラウトハイム・ウルリケ
制作アシスタント：小野塚央
フロント運営：寺地友子
プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/Tクルー：宇都宮千陽、崎濱恵梨、福原麻梨子、山口侑紀、弓野亜希、米谷今日子

特別協力：東京ドイツ文化センター、在日オーストリア大使館
後援：ドイツ連邦共和国大使館
主催：フェスティバルトーキョー

Text: Elfriede Jelinek
Direction: Jossi Wieler
Stage Design, Costumes: Anja Rabes
Music: Wolfgang Siuda
Lighting: Max Keller
Dramaturge: Julia Lochte
Cast: Katja Bürkle, André Jung, Hans Kremer, Steven Scharf, Hildegard Schmahl
Produced by Münchner Kammerspiele

Tokyo Performance
Translation: Tatsuki Hayashi
Surtitles: Ken Hagiwara-Wallentowitz

Technical Manager: Eiji Torakawa + Karasuya
Stage Manager: Koro Suzuki
Stage Assistant: Go Sato, Akiko Juman, Chie Hasegawa
Props: Kayoko Kuriyama
Stage Design Co-ordination: Naoka Fukushima
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Sound Co-operation from S.C. Alliance Inc.
Surtitles Co-ordination: Satoru Makuuchi
Translator: Sachiko Suga, Naoko Tahara

Photo: Jun Ishikawa
Video: Saikoudo Co., Ltd

Production Manager: Tomoya Takeda, Hiroto Kojima
Production Co-ordinator: Fumiko Toda, Ulrike Krauthelm
Assitant Production Co-ordinator: Chika Onozuka
Front: Yuku Terachi
Program Director: Chiaki Soma

F/T crew: Chiaki Utsunomiya, Eri Sakihama, Mariko Fukuhara, Yuki Yamaguchi, Aki Yumino, Kyoko Yonetani

Special co-operation from Embassy of the Federal Republic of Germany, Goethe-Institute Tokyo, Austrian Embassy/Austrian Cultural Forum
Presented by Festival/Tokyo



オーストリア大使館
オーストリア文化フォーラム



フェスティバル/トーキョー組織委員

Festival/Tokyo Organization Committee

| | |
|--|--|
| 天牛大生 | 振付家、演出家 |
| 萩田伍 | アサヒグループホールディングス株式会社代表取締役会長兼 CEO |
| 扇田昭彦 | 演劇評論家 |
| 永井多恵子 | 社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長 |
| 鶴川希雄 | 演出家 |
| 野田秀雄 | 演出家 |
| 野村高 | 狂言師 |
| 福原義春 | 株式会社資生堂 名誉会長 (五十音順) |
| Ushio Amagatsu Hiroyuki Ogita Akihiko Senda Takao Nagai Yuko Ninagawa Hidetoshi Noda Man Nomura Yoshihara Fukushima | Choreographer, Director Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd. Theatre critic Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO) Director Director Kyogen actor Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd. |

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都、豊島区、

東京文化発信プロジェクト室、東京芸術劇場、公益財団法人東京都歴史文化財団、
公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, Arts Network Japan(NPO-JN)

共催：社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、
ホテルメトロポリタン、ホテルグランドシティ、チノコト株式会社、株式会社白-water

Special co-operation from SEIBU HIGASHIKUJINDEN, TOBU DEPARTMENT STORE HIGASHIKUJIN, Sunshine City Princess Hotel, Hotel Metropolitan City, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakushisha Publishing Co., Ltd.

協力の場：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会

In co-operation with The Tokyo Chamber of Commerce and Industry, Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社アスターハリス・カンパニー、
有限会社ネビュラエストラサポート(公募プログラム)

PR Support: Poster/Hall's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for FT Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3FM、新潮、ART iT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3FM, SHINCHO, ART iT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年(2012年)10月27日(土)～11月25日(日)



フェスティバル/トーキョー実行委員会

Festival/Tokyo Executive Committee

| | | |
|----------|-------|----------------------------------|
| 名誉実行委員長 | 高野之夫 | 豊島区長 |
| 実行委員長 | 市村作知雄 | NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長 |
| 副委員長 | 吉末昌弘 | 豊島区文化商工部長 |
| 委員 | 八巻規子 | 豊島区文化・商工文化デザイン課長 |
| | 大沼映雄 | 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長 |
| | 裕正人 | 公益財団法人としま未来文化財団 部長 |
| | 蓮池奈緒子 | NPO法人アートネットワーク・ジャパン 代表 |
| | 相馬千秋 | NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター |
| 監事 | 天貝勝己 | 豊島区総務部総務課長 |
| 法務アドバイザー | 榎井健策 | 北海道弁護士会(弁護士) |

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Director of Toshima City
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshida, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretary of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasegawa, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Kazumi Anagawa, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kenzaki Fukui, Hisato Kitazawa (Koto Dori Law Office)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

Executive Committee Office

| | |
|-----------------|-------------------------------------|
| プログラム・ディレクター | 相馬千秋 |
| 事務局長 | 蓮池奈緒子 |
| 事務局長補佐 | 小島寛大 |
| 制作総括 | 武田知也 |
| 制作 | 河合千佳、喜友美麻江、小森あや、相山由香、 戸田史子、藤井さゆり |
| メディア戦略 | 松本花音 |
| プログラム・リサーチ | クラウハイム・ウルリケ |
| アジア事業コーディネーター | 小山ひとみ、李丞孝 |
| 票務管理 | 兵原理江、岡内淳 |
| チケットセンター | 佐々木由希子、佐藤久美子 |
| 総務 | 葦原円花、一色真寿 |
| 経理 | 堀久美子 |
| 小製作アシスタント | 小野塚英樹、砂川史織、田中沙季、田野入涼子、中山亜以 |
| メディア戦略補佐 | 冠根葉奈 |
| アジア事業コーディネーター補佐 | 吉岡真衣子 |
| インターン | 伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里 |

| | |
|---------------------|-------------------------------|
| 技術監督 | 賀川英司 |
| 技術監督アシスタント | 河野千鶴 |
| 照明コーディネーター | 佐々木真衣子(株式会社ファクター) |
| 音響コーディネーター | 相馬千秋(有限会社サウンドエクス) |
| アートディレクション+デザイン | アジール(佐藤直樹+中澤耕平+谷陽子+穂永明子+菊地昌隆) |
| ウェブサイト | 演田真一+田中裕也(株式会社コトワーク) |
| パブリシティ | 平昌子、望月章宏 |
| 海外広報・翻訳 | アンドリュース・ウィリアム |
| 出版 | 渡辺淳 |
| 編集・執筆 | 鈴木理映子 |
| 編集・執筆 (TOKYO/SCENE) | 影山裕樹 |

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasegawa
Assistant Administrative Director: Hirotoomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators: Chika Orii, Kawai Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujiki
Ticket Administration: Rie Nagahara, Fusuko Shihada
Program Research: Ulrike Krauthelm
Asia Projects Co-ordinators: Hitomi Oyama, Seunghyo Lee
Technical Administration: Rie Nagahara, Fusuko Shihada
Ticket Office: Yumiko Saeki, Kamiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki
Accounting: Kamiko Tsutsumi
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozaka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanohri, Ai Nakayama
Assistant Media Strategy: Manana Kanamori
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Maiko Yoshioka
Trainees: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tabei, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki
Technical Director: Eiji Torikawa
Assistant Technical Director: Chiaki Soma
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Direction+Design: Asyū (Naoki Sato + Kouhei Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)
Website: Shinichi Hamada+Yoko Tanaka (fortwork.jp)
Public Relations: Masako Taira, Akhino Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kagayama

FT/クルー：会津麻美、青島美和、安達彩、石引康子、一ノ瀬真志、若城幸志、止村康哉、宇都宮千晴、内海ささき、遠藤乃判子、大泉尚子、大賀啓子、大庭愛香、岡崎由子、緒方彩乃、岡本光代、岡本佳子、尾澤奈生、小野千尋、加藤真帆、鹿子不直美、金子穂高、川口 潤、木口七海、木下玉美、金セツム、計智繪、相谷佳美、黒沢友実、黒沢寛子、齊藤美音、齋藤絵里佳、滝澤梨梨、佐藤友香里、佐藤音子、霜島悠子、柴田知子、鈴木智香子、間島弥生、高橋悠祐、田中友香、寺本奈津美、照田美香、岡田由紀、水杉彩子、中村真樹、中村みなみ、中山由紀、西岡幸行、能戸みな美、畑端富美、初村和実、花田雅美、早川幸菜、林原菜、人見真央、廣瀬加乃、福原麻梨子、福村 舞、藤原松太、船山結菜、増尾志、松嶋理奈、中村早絵、本本雄哉、丸山未来、三橋泰正、岡 勉、矢島尚、船内聖司、山口布紀、山室木園、山分可子、丹野亜希、吉田由貴、米谷今日子、渡辺 夏

FT Crew: Minami Aizu, Miwa Oshino, Aya Akashi, Yasuko Ishikubo, Takashi Ichinose, Taiyo Iwaki, Yasunasa Usugui, Chiaki Utsunomiya, Chiaki Utsunomiya, Noriko Endo, Ozumi Naoko, Keiko Ogo, Aika Omichi, Yuko Okazaki, Aoyu Ogata, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Okamoto, Yuyo Otawara, Chihiro Ono, Maho Rato, Naomi Kaneko, Joy Kaneko, Akane Kawaguchi, Namiko Kiyochi, Tamako Kiyochi, Saorin Kim, Chiyo Kyo, Yoshimi Kiritani, Tomomi Kurokawa, Hiroko Kozaki, Naomi Sakai, Erika Saito, Eri Sakikawa, Yukiko Sato, Kyoko Sato, Mumeo Shimotani, Tomoko Shibasaki, Chikako Suzuki, Yayoi Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Tokumura, Xuru Tani, Sayaka Nagai, Naoko Nakamura, Mimihi Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nakasaki, Mirami Noto, Fumi Hatase, Kazumi Hatsumi, Masami Hanada, Haruna Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Hanada, Kano Hirose, Mariko Fujiwara, Miki Furukawa, Kenta Fujiwara, Yuna Funakawa, Kei Masakawa, Rina Matsushima, Sae Matsumoto, Yuya Matsumoto, Mirai Maruyama, Yasunasa Mizuno, Hyemin Min, Aya Tojima, Saeji Tanaka, Yuki Yamaguchi, Kizono Yamamura, Masashi Yamawaki, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonemitsu, Sara Yamashita

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会
アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYU)
オペレーション：小川 剛
印刷：アトム株式会社
発行日：2012年11月9日
禁無断転載

お問合せ先
フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
〒170-0001
東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内
TEL: 03-5961-5202
HP: http://festival-tokyo.jp/